

# つくる

## Manufacturing

能登川の産業を統計上から見ると、「窯業・土石製品製造業」が大きな位置を占めています。以前は繊維工業や葎・竹を使ったスダレ製品などが盛んでしたが、近年の繊維産業の構造不況などにより、その数字は順位が入れ替わりました。



大正から昭和期にかけてこの町を潤(うる)してきた繊維産業

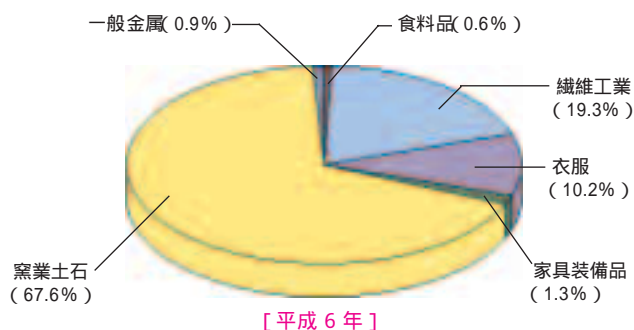
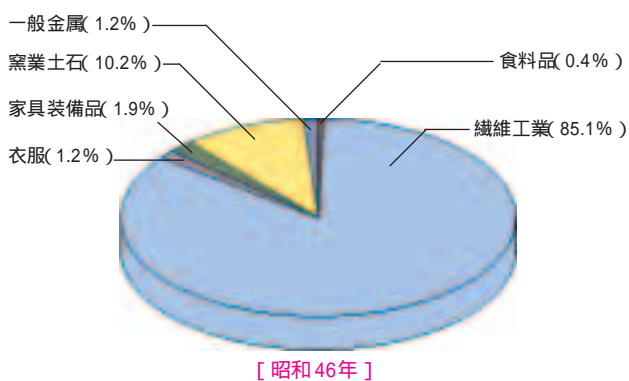
## 地場産業

農耕を中心としたこの地域も、明治時代には地方産業として麻織物・葎・竹製品などの特産品を産するようになりました。とくに麻製品には県も力を入れ、明治44年(1911)に工業試験場を設けています。大正8年(1919)には日清紡の前身である日本カタン糸が設立されるなど、工業史の1ページを飾りました。しかし伝統産業とも言われた麻布の生産など、永い歴史のなかで栄枯盛衰を経たこれらは、新しい産業の台頭とともにその地位を譲ってしまいました。



愛知川の竹を利用した商品の製造

産業分類別事業所製造品出荷額の移り変わり



滋賀県立能登川工業試験場

能登川の麻織物に着目していた県が、阿部市郎兵衛氏らの尽力もあり、明治44年(1911)に設立しました。現在は「滋賀県東北部工業技術センター能登川支所」と改称されています。

まし  
麻糸の名を残す

農家副業の手紡大麻糸から外国  
亜麻製紡織糸に移行、明治34年に  
糸の主な仕入れ供給元としてまし  
商会在が設立されました。

商店街

昭和30年(1955)の商店数は296  
店舗。大規模スーパーの進出をひ  
かえ、変化のきざしを見せはじめ  
ました。そして、平成8年(1996)  
には近代化事業による工事が本格  
化し、商店街が大きく変わってき  
ました。



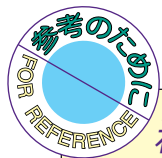
滋賀県東北部工業技術センター能登川支所



麻糸商会在



元町通り商店街



ふとん  
布団の「布」の字は  
能登川から

明治36年頃、阿部元太郎氏の  
発案により座布団の規格を定め  
ました。そのとき、蒲団の「蒲」  
の字を麻布の「布」の字をとって  
「布団」としました。



猪子山からの夜景

### 新しい工場の進出

昭和44年（1969）地域開発と財源確保を目的に工場誘致が話し合われ、公害問題を乗り越えた昭和46年12月、特殊ガラスを生産する日本電気硝子能登川事業場の操業がはじまりました。

工場規模は、敷地面積2万3400平方メートルで年間生産高は約500億円あります。従業員は関連企業も含めると約1500名、そのうち町内からの通勤者は約500名にもなります。現在、工場ではスムーズな生産活動による、安定した雇用推進を図るなど地域社会への貢献をめざしています。当町の主要産業であった繊維工業にとって代わり、窯業と分類されるこの産業は町内の製造品出荷額

の約70パーセントを占めるにいたっています。平成2年（1990）台風による愛知川決壊で大きな被害を受けた同工場では、今後の自然災害の防止対策を行政に期待しています。

また、ケーブルラックを中心に製造している電材メーカー ネグロス電工は平成3年、当町が大阪と名古屋のほぼ中間点となることから物流の拠点として最適であり、工場立地に必要な面積の土地を得ることができる、などの理由から、神郷工業団地に進出してきました。

これらの新しい企業の進出は、当町の産業に活力を与え、能登川町発展の原動力となることでしょう。



日本電気硝子



ネグロス電工

くみ ひも  
組 紐

組紐の歴史は古く、奈良時代に中国・朝鮮から渡来したと伝えられています。かつて能登川町では、組紐が盛んに行われていたと言います。羽織の紐などを組み、「京

組紐」として京都へ出荷されてきました。そしていま「京組紐・信のぶ」によって新しい感覚の装飾品としてよみがえりつつあります。



組紐をつくるみなさん

酒 造

増本酒造では、良質な愛知川の伏流水ふくりゅうすいを汲み上げ、うすざくら「薄桜」「能登川水車」など銘うった地酒を製造しています。



古い煙突が残る増本酒造

飲料水

平成2年(1990)能登川の豊富でおいしい水を求めてホームコーポレーションが大阪より移転してきました。こんこんと湧き出る水は「鈴鹿山系の水」としてさまざまな商品となり、全国へ出荷されています。そして平成6年の全国的な大湯水時だいかつすいじや平成7年の阪神大震災には、この水が被災地へ続々と送られました。



ホームコーポレーションの湧水貯蔵タンク